

《2009年12月例会報告：“クライフvsベッケンバウアー” 上映会兼サロン2002忘年会》

【日 時】 2009年12月19日（土）18：00開場、18：30開宴、19：00上映開始
終電までに解散（何とか達成?!）

【会 場】 サッカー居酒屋「いなば」
〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町24-18 東松ビル2F（JR渋谷駅／南口から徒歩5分）

【イベント】 お宝映像＜AFC AJAX vs FC BAYERN MUNCHEN＞上映会
EUROPEAN CUP 1972～1973 QUARTER FINALS 1st Leg（1973.3.7.Amsterdam）

【参加者（会員）】 麻生征宏（榊学研教育みらい） 阿部博一（日本サッカー史研究会） 金子正彦（会社員） 北原由（都立武蔵野北高校） 熊谷建志（会社員） 小池正通（杉並アヤックス） 白井久明（弁護士） 鈴木崇正（NECメディアプロダクツ） 田中俊也（三日市整形外科） 徳田仁（榊セリエ） 中塚義実（筑波大学附属高校）

注）小池氏は12月に新入会

【参加者（未会員）】 女性1名

【コメント】

◆中塚義実「ついに会った“夢のゲーム”」

大阪府茨木市立南中学校サッカー部に入部して本格的なサッカー人生が始まったのは、1974年のことでした。夏休みに入る前にあった「西ドイツ vs オランダ」の生中継のことを知らなかった私は、夏休みの書店でサッカー誌「イレブン」をはじめて手にとり、WM74のことを写真と文字で知りました。世界のサッカーとの出会いです。同じ頃、「ワールドサッカー（東京では「ダイヤモンドサッカー」と言っていた）」という番組の存在を知り、世界のサッカーを映像で感じるできるようになりました。世界との出会いという点で、1974年の西ドイツ大会は、私にとっては特別な大会です。

この大会の主人公は、ベッケンバウアーとクライフです。両雄がそろってピッチに立った決勝戦、西ドイツ vs オランダのゲームは、いま見ても手に汗握る好ゲームです（今回も興奮しました）。

このゲームの前に、クラブシーンでベッケンバウアーとクライフが対戦したことがあり、しかもクライフ率いるアヤックスが、ベッケンバウアーのバイエルンを4-0と一蹴したことを知ったのもおそらく中1の頃です。西ドイツびいきだった私にとってその話はショックでしたが、いつかはそのゲームを見て確かめてやるぞと、中学生ながら心に誓ったものです（大げさだけど本当です）。

たぶん中3の頃、サッカーマガジン誌に「1973年のアヤックス vs バイエルンのビデオを持っている人はいませんか」という投書があり、福井県の方（だったと思います）から「持っています」との投稿があったと記憶しています。日本にもこの試合のビデオがあることがわかった瞬間であり、「いつか必ずみてやるぞ」の思いが現実味を帯びたときでした。しかしその後チャンスがないまま、ず～と思いつけて30数年。何とサロンの会員が持っていたなんて…。阿部さん、本当にありがとう！

「いなば」ではじめてみたそのゲームは、期待通り、いや期待以上のビューティフルゲームでした。

おもしろすぎます。美しすぎます。懐かしすぎます（これが大きいかもしれません）。アヤックスも、バイエルンも、レフェリーも、サポーターも、いずれもスーパーです！

ベッケンバウアーはイメージどおりでしたが、いくつか思い込みがあったことにも気づきました。シュバルツェンベックはもっとごつごつしていると思っていたけど、ボール扱いはスマートでした。ミュラーは前線に張っているだけと思っていたけど、結構中盤に下がってつなぎに入ります。ブライトナーはサイドバックのイメージが強いけど、精力的な中盤の選手でした。バイエルンの個性的な選手は大変魅力的で、このゲームも、どちらが勝ってもおかしくない内容です。

それでも得点を重ねたのはアヤックスです。クライフはもちろんですが、みんながみんなスーパーです。「攻撃の時はいまのバルセロナ、守備の時は90年代のACミラン」。アヤックスについてはこのような表現で盛り上がりました。「いなば」にいた人はみな興奮気味です（特に私と、隣に座っていたS氏）。

テレビの映像も気に入りました。カメラの台数が少ないので、いらぬアップはありません。基本は引きの、全体が見やすい映像です。

GKへのバックパスがあるのもいいですね。安心できます。それにこの人たちは時間稼ぎもまったくしません（バックパスが禁止になってせわしなくなってしまったのは、ディノ・ゾフのせい？）。

笛が少ない。つまりぬファールも、審判に対する文句もない。それにボールが外に出ない…。

実にすがすがしいゲームでした。

こんなにいい気分でサッカーを見たのは、去年の“お宝映像”（1953年のイングランド vs ハンガリー）以来です。早くも次回の「お宝映像」が楽しみになってきました。

1959-60シーズンのヨーロッパ・チャンピオンズカップ決勝、「レアル・マドリード7-3アイントラハト・フランクフルト」の映像を持ってる人はいませんか？

◆鈴木崇正「やっぱり未来のサッカーだった」

中塚先生と同じ1961年（昭和36年）生まれというのが、70年代のオランダやアヤックスに対する「異常な執着」のカギのような気がします。東京の片隅の中学1年生当時、期末試験時期にもかかわらずWM74決勝の深夜の生中継にかじりついた私は、いまでも「オランダ」「クライフ」「アヤックス」といった単語にやたら敏感に反応してしまいます。忘年会ご出席の皆さまには、人目をばばからない興奮、失礼しました。

いまから5年前に、「なぜ美しいサッカーは負けるのか」というテーマの本を思いつき、『理想のフットボール 敗北する現実』（大住良之著 双葉社）というカタチにしました。そこで取り上げたチームがWM74のオランダ代表であり、その基礎をなしたのは60年代後半～70年代前半のアヤックス・アムステルダムでした。

中学生の頃、アヤックスが欧州で3連覇したことはサッカーマガジンなどの情報で知ってはいましたが、今その試合をフルタイムで見られるのはサロンのおかげですし、阿部さんのおかげです。本当にありがたいです。

試合についての感想は中塚先生と似たり寄ったりなのですが、やはりアヤックスはとても進んだサッカーを実践していたと思います。

当時「オーバーラップ」は欧州、南米の強豪国では当たり前の戦術になっていました。DFの選手はもう、守備だけではなく攻撃もできなきゃダメなんだ、と当時の中学生も意識はしていましたが、今回見たアヤックスの選手のポジショニングや動きは、単なる「追い越し」なんてもんじゃありませんでし

た。さっき最前線にいたと思ったクライフが最後尾にいるし、サイドバックのクロルはピッチを斜めに横断していました。

おそらく対戦相手は何がなんだかかわからないうちに試合が進んでいったのではないかと思います。これが「トータル・フットボール」「ローテーション・フットボール」などと概念化されて説明されるようになるのは、WM74の後になってからでした。

21世紀の今も、このチームがチャンピオンズリーグに出てきたら、かなり強い、いや、優勝しちゃうかもしれません。アヤックスとオランダ代表はまさに「未来のサッカー」を実践していたと、この試合のビデオからあらためて実感しました。

もうひとつだけ触れておきたいことがあります。

このビデオを見ながら、私はここに登場するほとんどの選手たちのフルネームを記憶していることに気づきました。フランツ・ベッケンバウアーやヨハン・クライフだけじゃありません。ヨニー・レップ、ヴィム・シュルビア、ピート・カイザー、ウリ・ヘーネス……とりわけ「ハンス・ゲオルク・シュワルツェンベック」という長い名前まで記憶していました。

これはダイヤモンドサッカーの実況・金子勝彦さんの功績のひとつだと思います。金子さんは選手を紹介するときに、その試合で必ず一度はフルネームを紹介したので、これを毎週耳にしていた中学生は自然とフルネームを覚えてしまったのです。

金子さんは、選手の身長・体重の紹介も忘れませんでした。そういう基本情報というか、まず必要な事実を漏れなく正確に伝えるのがプロの仕事というものですし、そういう金子さんの「プロの流儀」には、サッカー選手に対する尊敬の念さえ感じます。

そういうプロの仕事によって育てられた私たちの世代は幸せでした。それに比べ、今のサッカー実況の、なんと余計な情報の多いことか……あっ、これはやめとこう……。

◆麻生征宏

サッカーのターニングポイント、「トータルフットボール」の代名詞として必ず出てくる1974年のワールドカップ西ドイツ大会のオランダ代表。ドイツとの決勝戦は何度か目にしてきましたが、「じゃあ、その前はどうかだったの？」という疑問を少なからず持っていました。

1973年の時点で、「トータルフットボール」としての（オランダ代表的）スタイルは、ほぼ出来上がっていたように感じました。その翌年のワールドカップで、きちんとそのスタイルに対応した西ドイツ。この日、2試合を続けて見て感じたのは、1974年の決勝は『「トータルフットボール」と「それへの対応』』が見事に提示されていたということ。だからこそ語り継がれるゲームたりえたのだと思いました。

1973年のゲームを見ずには、この感覚は得ることはできなかったと思っています。加えて、ゲームを見ながらの「濃い解説」や「熱い想い（想い出）」を聞いたのも得がたい経験でした。すばらしい機会を与えていただいたことに感謝しています。もっとたくさんの方が来れたらよかったのに～。

◆熊谷建志

ハイボールとともに一人で撃沈していた熊谷です。

そろいも揃ってBeatlesのようなロングの両チーム選手、タバコ企業も名前を連ねるシンプルな広告看板、すねあてのない短いソックスなど70年代の香りがところどころにあり楽しめました。

◆小池正通

初参加でいきなり、中年オヤジ・サッカー臭プンプンの、濃い空間に紛れ込みました。アヤックスの試合を見て感じたことは、「これバルサのサッカーじゃん！」ということです。実際、バルサのサッカーより自由です。ダニエウ・アウベス（現バルサ）がいた頃の、イケイケ・ドンドン、セビージャのようなサッカー、それ以上の自由なサッカーをしていた気がします。後ろからどんどん追い越す、追い越す。えっ、クライフ」がそこにいる。より自由で、創造的で、美しいフットボール。

この当時のオランダ・サッカーはまだ三流だったという、鈴木さんのコメントが印象的でした。より高みへ飛びすためには、枠に囚われない、自由な発想が必要なんだと強く感じます。以前、オシムさんとの対話の中で、日本サッカーの飛躍は何かという質問に対し、オシムさんは「日本人は日本人であるべきだ」というコメントを残してくれました。（マスコミで言われた「日本人の日本人化」という表現は誤訳です）

あのアヤックスの映像を見て、あれはオランダ人だからこそ、できるサッカーなのだと思います。

さて、2010年南アで世界を驚かす、どんなサッカーを日本代表は見せてくれるのでしょうか？楽しみであり、不安でもあります。

以上